

臨海図書館の研究 千葉県的事例を中心として

松田 典之

Research on the seaside library, focusing on the case of Chiba

Noriyuki MATSUDA

Abstract

Since the Meiji era, when beaches for the main purpose of entertainment have become widespread, the beaches have become leisure lands. Against this background, seaside libraries were held all over the country. Seaside libraries were also held in various parts of Chiba prefecture. As a result of examining and analyzing the cases of seaside libraries nationwide, focusing on the cases in Chiba prefecture, there are three types of seaside libraries: collection for loan to groups type, mobile library type, and regional promotion type. It was found that it is defined as "a business related to books, etc. for a certain period of time, mainly at the beach, etc., with the local libraries and organizations playing a central role."

Key-words

臨海図書館 海浜図書館 砂浜図書館 千葉県立図書館 海水浴場

1 本研究の目的

臨海図書館とは何か、各種図書館情報学関係の用語辞典等には「臨海図書館」「海浜図書館」といった項目はない。わずかに、図書館問題研究会図書館用語委員会（編著）『図書館用語辞典』（1982）の緑陰図書館の項目に「緑陰文庫ともいう。館外活動の一環として、地域の図書館が中心になって夏季休暇中の児童を対象に、神社の境内、海辺などで一定期間、本を貸し出しするもの。海辺で行われるものは海浜文庫ともいう。紙芝居、おはなしなどを併せて行う場合もあり、児童に対する集会行事の一つとして行われることもある」⁽¹⁾とあるだけである。

本研究の目的は臨海図書館とは何かを、事例を用いて明らかにすることである。しかしながら、臨海図書館を論じるには、臨海図書館が存在しえた背景はどのようなものであったか、臨海図書館は地域社会とどのように関わりがあったのか、といった点を問う必要がある。さらに臨海図書館と地域社会の関係を考えた際

に、重要な要素となってくるのが、海水浴の普及と海水浴場の開設である。本研究ではこの点についても視野に入れながら検討を進めることとした。

また、臨海図書館は文字通り、海洋に面した県でしか、実施されていない。千葉県は太平洋と東京湾に面しており、東京に近いことから、明治期より海水浴場が多数設置されている。また、後述するように県立図書館のみならず町立図書館、私立図書館、社会教育団体が臨海図書館を実施していたことから、臨海図書館のあり方が他の地方より多様である。そこで、これらの条件を踏まえ、本研究では、千葉県の事例を中心に検討を進める。

以上の検討は、図書館の館外サービスの一端を検証するものとして位置づけることができる。

臨海図書館については、臨海図書館の他に、海浜文庫、臨海文庫、海浜図書館、納涼文庫、夏期文庫などと様々に呼ばれているが、本研究では臨海図書館を用いる。

2 先行研究

臨海図書館に関する先行研究は、臨海図書館を概略的に紹介したもの、個別地域における図書館史のなかで紹介されたもの、の2つに大別できる。日本で最初に臨海図書館について紹介したのが戸野周二郎の研究である。

臨海図書館を日本で初めて紹介したのは、戸野周二郎（以下、戸野）である。戸野は東京市立図書館設立の担当官として日比谷図書館の建設に尽力した⁽²⁾。日比谷図書館建設時の調査と研究を『学校及教師と図書館』にまとめている⁽³⁾。この戸野の唯一の著作は、明治時代に書かれた図書館を主題とした図書としては、『図書館管理法』について早いものである。内容は、公共図書館の運営、技術、実務面の記述、全般にわたって、外国・米国の考え方を全面的に導入し、援用して構成されている。臨海図書館については「第十八章 避暑地湯治場及海水浴場に於ける図書館」で紹介されている。この中で、戸野は、我が国においても避暑地や海水浴場、湯治場等には、貸本屋が必ず営業されている。時代の進歩と共に浴客等が図書を愛読するものが多くなり、有力者により合資組織で図書館を設置するか、もしくは公共図書館を設立するか、適切な方法を講じて、この種の図書館の設立を計画すべきである。これにより図書館固有の利益を地方人民に与えるだけでなく、旅行客を誘致して、その土地が反映するための一助となるとしており、ここでは臨海図書館の紹介にとどまり、具体的な内容については書かれていない。この第十八章は、『図書館雑誌』海外彙報にある「避暑地及び湯治場における理想的図書館」の記事の大部分をそのままのせている⁽⁴⁾。しかしながら、『図書館雑誌』の記事には臨海図書館について書かれておらず、戸野がどこで臨海図書館についての知識を得たのかわからない。戸野は後に三重県四日市市の市長となった。四日市市立図書館は戸野の市長在任中に「海浜図書館」を実施している⁽⁵⁾。

楠田五郎太（以下、楠田）は、昭和初期の岡山市立岡山図書館で積極的に図書館の館外サービスを進めた人物である。楠田はその著『動く図書館の研究』で図

書館の館外サービスについて紹介している⁽⁶⁾。臨海図書館については、「海浜図書館」の項目を設けて紹介しており、臨海図書館が図書館の館外サービスの一つであるとし、さらに臨海図書館の目的は「図書館と読書の宣伝」としている。臨海図書館の具体的な運営方法として、岡山市立岡山図書館の宮道海水浴場における臨海図書館の運営、宣伝、費用などが述べられている⁽⁷⁾。『動く図書館の研究』は臨海図書館の具体的事例を挙げながら、館外サービスであることを最初に位置付けたものである。しかしながら、個別の館外サービスについての具体的事例を挙げているだけで、臨海図書館とは何かについては語られていない。楠田は後に岡山市立岡山図書館を退職、兵庫県巡回文庫に就職し、臨海図書館を実施している⁽⁸⁾。

日本各地の臨海図書館の事例については、各図書館の図書館史に記載されていることが多い。千葉県の事例については、『図書館雑誌』や千葉県立図書館報である『千葉文化』⁽⁹⁾、千葉県公共図書館協会報である『房総図書館と志料』⁽¹⁰⁾などに個別の図書館の事例が記載されている。臨海図書館について包括的に研究された学術論文はない。

3 海水浴場の歴史 千葉県の事例を中心に

「海水浴」が夏季における余暇活動として行われるようになったのは、明治末期のことであり、それまで海水浴は、病気や怪我の治癒を目的として行われ、医療行為の一環として位置づけられていた⁽¹¹⁾。明治期には、海水浴は療養型海水浴と行楽型海水浴の存在があり、行楽型海水浴は療養を目的としない海水浴で、娯楽が主目的のものである⁽¹²⁾。

明治後期から大正期にかけては、全国に海水浴場が開設されたが、その多くが行楽型海水浴場であった。行楽型海水浴場の開設が海水浴の国民的普及の基盤となったのである⁽¹³⁾。

大正期から昭和期にかけて千葉県の臨海地域は避暑地・海水浴場として一段の発展をみせた。千葉県の海水浴場の発展の理由として、まず、鉄道網の整備が挙げられる⁽¹⁴⁾。外房方面では、1899年に房総鉄道が大原

まで開通し、1909年には大原海水浴場が開設された。内房方面では、1912年に木更津、1916年に金谷（富津市）、そして1919年には北条（館山市）まで鉄道が開通した。内房方面では、1925年までに安房鴨川駅まで開通、1927年4月に勝浦～興津間が開通し、更に安房鴨川まで開通して房総線の環状線が完成した⁽¹⁵⁾。1921年には京成電気軌道が千葉まで開通し、船橋・稲毛・本千葉海岸などが海水浴場・娯楽施設となった⁽¹⁶⁾。交通手段の発達により日帰り海水浴が可能になり、中産階級以上程度の人々が海水浴に赴くようになり、海水浴のレジャー化が進んだ⁽¹⁷⁾。さらに東京における水泳場の閉鎖が千葉県における海水浴場の発展に拍車をかけたと考えられる。明治末期から大正初期にかけて、隅田川や荒川に水泳場が設けられたが、工場の増加により、水質汚濁が進み、1917年、東京市内での隅田川、荒川の水泳は禁止された⁽¹⁸⁾。これにより交通の便が良くなった東京近郊の湘南や千葉県に海水浴客が多く訪れるようになったと考えられる。

その他、海水浴場の発展要因として、学校教育における遊泳訓練、夏季臨海授業の普及などがと考えられる。明治末から大正初期にかけて、東京では、児童生徒の夏季休暇の積極的利用が提唱されていたが、小学校では教員らが臨海学校や林間学校を実施することは困難であった。それは「東京府訓令第10号」（1895年）により、勤務先学校の一部児童を対象に、特別な教育を行うことを禁じられていたからである。しかし、1918年の「東京府訓令第21号」により、市内の小学校において臨海（林間）学校を実施する場合に、知事の認可さえ受ければ公立小学校の教員が、林間学校を実施しないしは参加することが可能となった。1925年には、新たに「東京府訓令第16号」が公布され、手続きがより簡易になった。これによって、東京市の臨海学校の実施要件が緩和され、大正期後半には小学校における臨海学校実施数が増加していった。さらに1921年には、帝国議会において臨海（林間）学校の実施を全国的に奨励する「林間学校奨励補助に関する建議案」が提出されている。これにより、東京市内の小学校もしくは保護者会により多数の臨海（林間）学校が実施される

ようになった⁽¹⁹⁾。千葉県の臨海地域では、夏季臨海学校の開設が相つぎ、団体客の宿舎の需要も多くなり、これにともない家族連れの一一般滞在者も次第に増加して観光事業の基礎が形成されていった⁽¹⁹⁾。

海水浴場の開設とともに、海水浴客を対象とした、みやげ物屋や休憩所、飲食店などの商売、すなわち海の家が建ちはじめた。1920年には、東京鉄道局が後援者となり宿泊定員200人の千葉の北条海水浴場で「海の家」をはじめている⁽²⁰⁾。これに先立って、北条町は1915年に町設海水浴場に次の改善を行っている。まず、北条休憩所を拡張して、長須賀・八幡の休憩所とともに、新聞、雑誌の閲覧所、婦人脱衣所、洗身場を特設し、麦湯を提供した。また北条休憩所には、相撲の土俵場、運動機械を設備し、花火大会や素人相撲を開催した⁽²¹⁾。

大原共同海水浴場では、1909年に次の施設を建設している。海水浴場の事務所、男子、女子休憩所、掲示場（遺失物盗難品又は報告通知など）、臨時郵便ポスト、鉄道院休憩所、砂浜での娯楽用に、ブランコ・遊動木・相撲場・回旋機・鉄棒などが拙著され、その他に一般向きとして、トランプ・烟火・ピンポン・囲碁・将棋・綱引道具・遊泳競技道具・バスケットボールなどが用意された。また琴、尺八、マンドリン、バイオリン、オルガンがあり、印刷器や写真暗室まで備わっていた。さらに1913年7月に文化団体「吐虹会」により、新聞縦覧所が設置されている。これは筆箆張り建てられ、正面約三間、奥行同じくらいのもので、東京及び千葉県内の日刊新聞や主な新刊雑誌、欧米の新聞雑誌10数種も備えられていた⁽²²⁾。このように、海水浴場がレジャーランド化する中で、いくつかの海水浴場では、新聞、雑誌の閲覧がサービスとして実施されており、臨海図書館を受け入れる素地があったと考えられる。

4 臨海図書館

日本において初めて臨海図書館を開設したのは茨城県立図書館である。茨城県では1921年に「夏期文庫」を開設した。東茨城郡磯浜町水産試験場出張所と多賀郡河原子尋常高等小学校の2か所に7月20日から9月10日まで、図書300冊程度を詰めた箱が設置され、海水

浴、避暑客、地域住民対象に運営された。実際の文庫の運営は、地元の学校、役所、青年会、有志に委嘱を行っていた。1925年には助川、鮎川、磯浜の3か所で実施された⁽²³⁾。

同じ1921年8月に、宮崎県立図書館が、青島海岸に「納涼図書館」を開設している。期間は、8月1日から20日間、毎日午前9時から午後4時まで、テントを張って図書館とした。1922年からは大正天皇が宮崎県を訪れた際の随員休憩所の建物を使用した。「納涼文庫」は、県立図書館の恒例の行事となり、1947年に「臨海文庫」と名を変え、1968年頃まで続いた⁽²⁴⁾。その他、宮崎県では1964年頃、延岡市立図書館が土々呂海岸で開設している⁽²⁵⁾。

徳島県立図書館では、臨海図書館を昭和2年度（1927年）より毎年実施していた。1933年7月20日から8月2日、小松島海水浴場にある不老閣に、新刊書を中心に約80冊を送付し実施した⁽²⁶⁾。

1930年頃から、高知県立図書館は「海浜文庫」を始めている。夏季休暇期間（7月末～8月末）、高知市種崎の千松公園（海水浴場）に組立書架、200冊余りの図書、折り畳み式椅子20脚。静座用の莫蔭10枚余りで開設していた。この文庫を担当する職員は当初1名のみ、後に三里村の青年団や学生がボランティアとして手伝っていた⁽²⁷⁾。

岩手県立盛岡図書館では1930年7月23日から270日まで、高田松原で海浜図書館を開設している。同年8月1日から20日まで、中野村図書館に委託して、中野駅附近の海岸に天幕張りの海浜図書館を開設している。1931年にも、高田松原で、1932年、中野村海岸、1935年から1937年まで磯鶏村海岸で海浜図書館を開設している。中野村では中野小学校長が主任となり、同校教員が交代に出張し児童数名を助手として図書の出納に当たっていた⁽²⁸⁾。

同じ岩手県の1930年に開館した高田町立図書館では、1931年7月23日～8月31日に高田松原に「海浜図書館」を開設している⁽²⁹⁾。

今治市立明德図書館では、1932年8月2日より同月28日まで、今治市天保山海水浴場の無料脱衣場の一部に

「臨海文庫」を設けていた。臨海文庫は1933年まで続けられた⁽³⁰⁾。

宮城県立中央図書館では、1933年から1940年頃まで、桃生郡野蒜村海岸に「臨海図書館」を館員が出張し開設している。1937年度の実績では、閲覧人数2154人の内、児童が1866人を占めていた⁽³¹⁾。

1936年、青森県立青森中央図書館では、青森合浦公園遊泳場の附近に「海浜図書館」を開いている。1934年には、県内図書館巡回指導も開始し、西海岸、津軽、下北両半島の漁村で読書相談をうけながら、未読者層の啓蒙・開発を行う「海浜文庫」を設けている⁽³²⁾。

兵庫県では長く県立図書館が設置されず、神戸市立図書館が県内図書館の中心的存在であった。1929年、兵庫県は県立図書館の代行機関として、県立巡回文庫を設立している⁽³³⁾。兵庫県立巡回文庫は、1937年に兵庫県下3か所の海水浴場（洲本市大浜海岸、竹野浜海岸、高砂町海岸）に「臨海文庫」を開設して、図書の閲覧、読書相談、巡回文庫事務の臨時取扱等を行った⁽³⁴⁾。

1937年7月、岡山県立図書館は、浅口郡沙美海岸、児島郡本荘村海岸、香川県本島海水浴場、児島郡渋川海水浴場、小田郡神島に「臨海文庫」を設置、1940年に、下津井港、浜の学校および市教育会主催夏季臨海学校に「海浜文庫」を送付している⁽³⁵⁾。

1941年静岡県立葵文庫では、静岡市大浜公園内に「海浜文庫」を開設している⁽³⁶⁾。

第二次世界大戦後、最初に臨海図書館を開設したのは1947年の宮崎県立図書館であった⁽³⁷⁾。

1950年には新潟県直江津公民館で公民館図書室とは別に公民館のベランダに「海浜図書館」（一般室と児童室があった）が実施されている。運営に当たった係員は、一般室では二交替とし、午前9時から午後5時迄1名、午後4時から9時閉館迄を男子高校生（アルバイト）2名が担当した。児童室は初年度は小学6年生数人ずつで奉仕したが、翌年から女子高校生（アルバイト）1名が担当した⁽³⁸⁾。

1951年7月には「海浜図書館」が高岡市伏木国分海岸で開設されている。この海浜図書館は国分自治会が婦人会と相談して開設、運営は児童クラブが中心に行っ

た。毎日午前10時から午後4時までの貸出時間中は中学生2人が交代で従事していた⁽³⁹⁾。伏木国分海岸では1937年に伏木町立図書館が、「臨海図書館」を実施しているが、写真資料しか残されていない⁽⁴⁰⁾。

秋田県立図書館では、1951年、由利郡下浜海水浴場に「海浜図書館」を開いている⁽⁴¹⁾。

1954年には洲本市立図書館が大浜海水浴場に「臨海図書館」を開設している⁽⁴²⁾。

以上のように、日本各地で臨海図書館は実施されている。その内容は多様であるが、巡回図書を臨海地域に送付し、現地の教員、青年団等が閲覧事務を行う、巡回図書の延長上にある臨海図書館と、図書館員が地域に赴き、図書の閲覧だけでなく、その他の図書館事業を行う現在の移動図書館に近い形で行われる臨海図書館もあった。

このことから、第二次世界大戦前から1960年代にかけての臨海図書館には2つの型があると考えられる。まず貸出文庫型、貸出文庫とは、「図書館が、地域の公共施設や各種団体にまとまった冊数を一定期間預け、そこから近隣の住民が本を借りることができるようにするもの」である⁽⁴³⁾。貸出文庫型は、施設、団体が図書館資料を借り受け、間接的に利用者にサービスを行うものである。

もう一つは移動図書館型である。移動図書館とは「公共図書館が図書館を利用しにくい地域の住民に対して、何らかの移動手段を用いて図書館資料を運び、図書館員による図書館サービスを提供する方式」のことである⁽⁴⁴⁾。移動図書館型は、図書館員が現地に赴き図書館サービスを利用者に提供する直接的なサービスである。臨海図書館は当初、この2つの型から始まったのである。茨城県立図書館は、貸出文庫型、宮城県立図書館は移動図書館型である。伏木国分海岸の事例は、自治会、婦人会が開催したものではあるが、図書の供給を伏木町立図書館が行っており、貸出文庫型である考えられる。

4.2 千葉県の臨海図書館

4.2.1 新更会

千葉県内で最初の臨海図書館は新更会が実施している。新更会は、1928年6月に成田山新勝寺が設立した、成人教育を主眼とした社会教育団体であり、成田図書館とは別組織の団体である。しかしながら、その設立には成田図書館の主任であった高津親義が、新更会の事務主任として諸般の事務を担当し、創立総会も成田図書館で行われた。新更会は巡回文庫用図書の貸出も実施しており、図書館事業に深い関わりを持っていた。1928年7月20日から8月20日まで、安房郡北条町北条海岸で臨海図書館を開設している。この事業の事務には、成田図書館があたり、館員の半数が出張し、準備及跡片付けなどを行った。この年、臨海図書館のため成田図書館が提供した図書は600冊であった。翌1929年7月20日から8月20日まで、保田海岸で二回目の臨海図書館が開設され、軽い読物1,000冊が選定、発送された⁽⁴³⁾。

4.2.2 公正図書館

公正会は1924年に浜口悟堂が銚子市に設立した社会教育団体である。公正会は図書館や学校など市民を対象とした社会教育事業を行っていた。公正会が運営する公正図書館は、1926年に開館し、当時まだ珍しかった開架式閲覧方式を採用し、館外貸出も行っていた。公正図書館では、1932年から夏期に「海浜文庫」と称する臨海図書館を、銚子市内の海鹿島・犬若・茨城県浜崎町にも開設し（後に銚子市名洗）、あわせて珠算と習字の講習会を開催している。建物は葦簀張りで、図書館職員5名を1名ずつ一週間交替で派遣された⁽⁴⁴⁾。

4.2.3 千葉県立図書館

千葉県立図書館では、第二次世界大戦前には、1931年から1941年まで、千葉県各地に臨海図書館を開設している。その目的は、海水浴客に対して読書の便益を図ると共に一層読書精神の向上を図るというものであった。開設場所は、1931年は千葉市本千葉海岸であった⁽⁴⁵⁾。

千葉県立図書館の臨海図書館は、開設する海岸に間口三間奥行四間の葦簀張小屋を建設し、標識として赤

布に、「千葉県図書館」の白字を表した旗を立てた。閲覧は無料であったが館外貸出は行っていない。資料は、新刊書、雑誌を中心に約200冊、新聞も備え付けられている。図書は15日ごとに入れ替えが行われおり、また期間中に1回読書発表会か又は感想文発表会の開催を予定していた⁽⁴⁶⁾。利用者は海水着のまま臨海図書館内に自由に入出りが出来た。利用者はまず、書架に並べた本の中で借りたい本を外から指で押し、係員がその本を書架から出して置く。次に、利用者は臨海図書館に入り、係員から閲覧票の紙をもらい、必要事項を記入して係員に提出すれば、希望する図書を借りることができた。同時に借りられる本は1回1冊であった。また、臨海図書館に所蔵がない図書については、係員に申し出れば可能な限り便宜を図ってもらえた。また、図書について疑問があれば係員に質問ができるなど、リクエストサービスや相談業務など図書館本館に近いサービスを受けられた。閲覧事務は、本千葉海岸では毎日、県立図書館員2名ずつ交替で勤務した。他の場所では、地元の役場吏員、小学校職員、女子青年団員が、これを担当した⁽⁴⁷⁾。

前述のように、千葉県立図書館が実施した臨海図書館は、1931年から1941年までと、戦後の1950年に実施されているが、詳細な統計が残っているのは、昭和7年度(1932年)から昭和9年度(1934年)までだけである。(図1)

昭和7年度から昭和9年度まで、総閲覧人数に占める児童の閲覧比率の最低値から最高値は58.1%から86.6%であり、県外者の閲覧利用については、9.7%から47.8%であった。開館場所、年度によってかなりのバラツキがあるが、利用者の児童の比率は高い。しかしながら、児童以外の利用も一定程度おり、児童だけでなくその他の利用も対象とした事業であると言える。また、相対的に児童の閲覧者比率と県外者の閲覧比率が他の開館場所の比べて高いところは、臨海学校での利用が多いと推測できる。利用者の多くを児童が占めるが、それ以外の利用も多い。また県外の利用が多いのも特徴である。これは、海水浴客、避暑客の利用が多いためと考えられる。

千葉県立図書館の戦前最後の臨海図書館は、1941年に千葉市のみの開館という縮小された形で、実施されている。当時の読売新聞によれば、縮小の理由は、共同主催の各地の観光協会が海水浴客誘致の必要を認めなくなった、誘致に努めなくとも海水浴客が殺到するためにこの事業に熱意を持たなくなったためとしている。また、千葉県立図書館も臨海図書館に注力するよりも、隣組文庫に力を注ぐことにしたことも理由の一つであるとしている⁽⁴⁸⁾。千葉県では1940年10月、県下の市町村に全部で6,151の部落会・町内会を、その下に26,478の隣保班(隣組)を整備している。隣組文庫はこれまで千葉県立中央図書館で実施して来た貸出文庫を一層簡易化し、隣組を通し一般家庭へ書物を送る、隣組常会の指導と読書の一般家庭への普及を目的としたものであった⁽⁴⁹⁾。千葉県立中央図書館の館外活動の目的が、読書の普及から思想善導に変化していき、臨海図書館は中止された。

第二次世界大戦後、1950年に千葉県立図書館東金分館で、臨海図書館が開設されている。実施場所は片貝海岸、開館日数22日(内3日間は雨で中途閉館)、閲覧者総数1,518名、貸出図書数約4,500冊、地方別には片貝、東金、東京都内、大阪、横浜等があげられる。利用者の、90%は学生であった⁽⁵⁰⁾。戦後、千葉県立図書館が実施した臨海図書館がこの1回だけだった。この前年の、1949年、千葉県立図書館は移動図書館車を導入し、千葉県内全域へのサービスを開始している⁽⁵¹⁾。図書館の館外サービスの主流は移動図書館車に移ったのが、理由の一つと考えられる。

4.2.4 鴨川町立図書館

1959年、鴨川町立図書館は、鴨川海岸で臨海図書館を千葉県立長狭高校生のボランティアにより開設している。また、1961(昭和36)年、7月25日から8月8日まで、鴨川海岸に臨海図書館を開設している。臨海図書館は子供達の学力向上と青少年健全育成の効果が期待されていた。建物は、鉄筋ブロック建てで50㎡の広さがあり、周囲を葦簀ではりめぐらし、70人分の机と椅子が備え付けられていた。その他にもシャワーの

施設があり、利用できた。開館時間は午前9時から午後4時まで、一日の利用者は約50人で、高校生がほとんどであった⁽⁵²⁾。鴨川町の臨海図書館は、1962年にも7月23日から8月15日まで開設されている⁽⁵³⁾。

4.2.5 千葉県の臨海図書館

千葉県の臨海図書館は、その開設主体が、県立図書館、町立図書館、私立図書館、社会教育団体と多様である。設立場所も千葉県内の内房、外房地方だけでなく県外にも及んでいる。他県にみられるような巡回文庫を海岸地域に運び貸出をするというようなものではなく、図書館職員が現地に赴き、貸出以外のサービスを行うという事例が多くみられた。また、統計でわかる範囲において、利用者は児童が多いが成人も一定数利用している。また千葉県外の利用者の割合も大きく、地域住民以外の海水浴客、避暑客の利用があった。

第二次世界大戦後、臨海図書館は全国的に、いくつかの事例があるものの、実施数が減少している。千葉県でも、1950年の千葉県立図書館山武分館、鴨川町立図書館の事例があるだけである。その理由として、自動車による移動図書館の登場が考えられる。

1940年代後半から1950年代前半にかけて、自動車による移動図書館が、主として都道府県立図書館によって実施され始めた。その中でも、1949年9月に開始された千葉県立図書館の「訪問図書館ひかり号」は全国の移動図書館事業に大きな影響を与えた。自動車による移動図書館の登場により、巡回による全域サービスが可能となった。そのため時期と地域が限定された臨海図書館は実施の必要性が低下したと考えられる。

5 近年の臨海図書館

5.1 砂浜図書館

ビーチライフ創生プロジェクトは、東海大学の学生が、横浜市金沢区「海の公園」と連携して、「砂浜の図書館」を設立し、秋の海岸で読書を楽しむライフスタイルを提案するものである。このプロジェクトは2008年9月から11月の休日を中心に15日、2009年は9月と10月の4日間実施された。2008年度は学生が設計した

ビーチハウスを図書館として活用した。2009年度は砂浜一面にビーチチェアを配置しオープン形式で実施された。砂浜図書館では、参加者が砂浜で読書を楽しむと同時にそれに関連した市民参加型のワークショップを実施している。図書は市民からの寄贈の約350冊を提供し、座椅子、約40脚が用意された⁽⁵⁴⁾。

この「ビーチライフ創生プロジェクト」を参考として、2012年、千葉県浦安市の市民団体「浦安未来2050」が浦安市総合公園で「海辺のライブラリー」を実施している。これは市民から寄付された本と、椅子を無料で貸し出し、読み聞かせや本の交換会などを行うというものである⁽⁵⁵⁾。

2020年、茨城県大洗町大洗サンビーチは、新型コロナウイルス感染症の影響で、閉鎖となった。(一社)大洗観光協会は、「ビーチの新しい活用法」をテーマに「砂浜図書館」を開設した。これは海岸の一部をタープエリアとパラソルエリアに分け、タープ席40席、パラソル席20席を設けており、一人500円の入館料を徴収している⁽⁵⁶⁾。2020年度は8月1日から8月14日までと10月31日から11月15日までの2回⁽⁵⁷⁾、2021年度は10月16日から10月31日まで実施された。資料は2020年度の第1回目は800冊、2回目は1,000冊、で県立図書館の除籍資料と寄附された資料が使われた。

第4章において臨海図書館の2つの形態、貸出文庫型と移動図書館型を示した。本章で取り上げた「砂浜の図書館」「砂浜図書館」はそのいずれでもない。運営主体は図書館ではなく、図書館資料を用いてサービスを提供しているものでもなく、図書館の関与はほとんどない。目的が読書振興や青少年の健全育成などではなく、地域振興であることなどが特徴的であることから、上記の2つの型と区別して、このタイプを地域振興型とする。地域振興型では、利用対象が海水浴客ではないので、開設時期を夏期に限定しない。海水浴シーズン以外の海水浴場の振興を目的にしている。

5.2 図書館と観光

近年、図書館と観光の融合が注目されている。公益財団法人日本交通公社観光文化情報センター長 旅の図

書館長の吉澤清良は、「現状では、図書館が地域の観光とほとんど結びついていない。観光地の図書館では、観光客が、地域住民と同様に、重要な利用対象として意識されてもよいのではないか。図書館が有する地域の知的財産は、地域の観光の魅力づくりや活性化に寄与できる余地が大きいと考える」とし⁽⁵⁷⁾、北海道大学観光学高等研究センターの松本秀人は、図書館が観光に関連した活動を行うことは、両者それぞれが抱えている課題を互いにある程度解決に導く可能性を持ち、図書館にも観光者にも、そして地域にもメリットのある試みだと考えられるのであるとしている⁽⁵⁸⁾。この観点から臨海図書館を考えると、臨海図書館は過去のものではなく、海水浴シーズン以外での臨海部の地域振興、観光振興策の一つとして活用できる。その視点で図書館が行う臨海図書館を再評価する必要がある。

6 考察

日本における海水浴は医療目的から始まったが、これがレジャー化すると全国各地に海水浴場が設置された。千葉県においては、鉄道網の発達、臨海学校の登場、東京附近の河川の汚濁により、海水浴場が県内各地に設置された。海水浴が一般化していくと、海水浴場は海水浴をするだけの場所ではなくなり、様々な施設が作られるようになり、海水浴場のレジャーランド化が進んだ。そのような背景の中、全国各地で臨海図書館が実施された。

千葉県内各地でも臨海図書館が実施され、実施主体は、公立図書館、私立図書館、社会教育団体など多様である。戦前期において、臨海図書館の目的は読書の普及であった。利用層は児童が多かったが、成人の利用も一定数あった。また取り扱う資料も図書だけでなく、新聞、雑誌なども利用でき、リクエストサービスや簡易な読書相談、イベントの開催などを行った臨海図書館もあった。しかしながら、戦時体制の移行とともに、図書館の館外サービスの主たる目的が思想善導に移行すると、廃止された。

第二次世界大戦後においては、臨海図書館は広く行われることはなかった。これは、図書館の館外サービ

スが、自動車の普及により、図書館の館外サービスの中心が、移動図書館に移ったことが理由の一つと考えられる。

21世紀になり、図書館でも社会教育団体でもない、大学生のグループや観光協会が臨海図書館を企画し、実施している。海水浴のできなくなった海水浴場に人を呼び込むという、地域振興を目的として臨海図書館を実施するというものであって、ここに新たな臨海図書館の可能性を見出すことができると考える。

これらの事例検討から、臨海図書館には、貸出文庫型、移動図書館型、地域振興型の3つの型があると考えられる。貸出文庫型とは、地域の施設、団体が図書館資料を借り受け、施設、団体が間接的に利用者にサービスを行うものである。移動図書館型は、図書館員が現地に赴き図書館サービスを利用者に提供する直接的なサービスである。地域振興型は、地域振興を目的として、地域の団体などが、臨海部で図書を中心としたサービスを行うというものである。

以上のことから、臨海図書館は、「地域の図書館が中心になって夏季休暇中の児童を対象に、海辺などで一定期間、本を貸し出しするもの」ではなく、臨海図書館は、「主として、地域の図書館・団体が中心になって、海辺などで一定期間、図書に関する事業等を行うもの」と定義づけられる。

7 今後の課題

臨海図書館は、図書館と観光の融合の観点から地域振興、観光振興策の一つとして活用できる。そのためには、日本だけでなく外国での事例も含めてを精査していく必要がある。このことについては今後の課題としたい。

図 1

年度	開館場所	開館総日数	閲覧総人員	閲覧総冊数	閲覧図書類	閲覧者
昭和7年度	安房郡 鴨川町海岸	30日	閲覧総人員 7,975名 一日平均 262名強 うち児童 6,292名 (児童閲覧者比率 78.9%)	8,131冊 一日平均 271冊	雑誌の3,784冊。以下の種別は統計上多少正確を欠いているため、概ねではあるが、矢張児童書、一般図書中の文学小説類、歴史伝記地誌類美術運動類の順である。	県内 図書館所在地市町内居住者 6,443名 図書館所在地市町外居住者 755名 県外 東京府市居住者 686名 他府県居住者 91名 (県外者比率 9.7%)
	安房郡 富浦村海岸	29日	閲覧総人員 2,512名 一日平均 87名強 うち児童 1,669名 (児童閲覧者比率 66.4%)	3,161冊 一日平均 109冊	雑誌 1,666冊 児童書 999冊 文学小説類 249冊 美術音楽運動類 79冊 歴史伝記類 69冊	県内 図書館所在地市町内居住者 1,344名 図書館所在地市町外居住者 37名 県外 東京府市居住者 1,088名 他府県居住者 43名 (県外者比率 45%)
	千葉市 本千葉海岸	45日	閲覧総人員 6,352名 一日平均 141名 うち児童 4,028名 (児童閲覧者比率 63.4%)	8,852冊 一日平均 197冊	雑誌 4,609冊 児童書 3,129冊 文学小説類 534冊 美術運動類 173冊 政治経済社会122冊	県内 図書館所在地市町内居住者 12,775名 図書館所在地市町外居住者 1,238名 県外 東京府市居住者 2,658名 他府県居住者 168名 (県外者比率 44.5%)
	合計	104日	閲覧総人員 16,839名 一日平均 162名弱 うち児童 11,985名 (児童閲覧者比率 71.2%)	20,144冊 一日平均 194冊	雑誌 10,059冊 児童書 5,025冊 文学小説類 2,653冊 歴史伝記類 708冊 美術運動 547冊	県内 図書館所在地市町内居住者 12,275名 図書館所在地市町外居住者 1,238名 県外 東京府市居住者 2,658名 他府県居住者 168名 (県外者比率 16.8%)
昭和8年度	安房郡 鴨川町海岸	30日	閲覧総人員 9,965名 一日平均 332名 うち児童 8,566名 (児童閲覧者比率 86%)	10,092冊 一日平均 336冊	雑誌 5,883冊 児童書 2,969冊 文学 595冊 芸術、運動、娯楽 163冊 歴史、地理、紀行 139冊	県内 図書館所在地市町内居住者 8,033名 図書館所在地市町外居住者 907名 県外 東京府市居住者 984名 他府県居住者 41名 (県外者比率 10.2%)
	安房郡 富浦村海岸	30日	閲覧総人員 2,149名 一日平均 72名 うち児童 1,442名 (児童閲覧者比率 67.1%)	2,699冊 一日平均 90冊	雑誌 1,251冊 児童 957冊 文学 253冊 随筆類 38冊 芸術、運動、娯楽 58冊	県内 図書館所在地市町内居住者 961名 図書館所在地市町外居住者 141名 県外 東京府市居住者 1,006名 他府県居住者 21名 (県外者比率 47.8%)
	千葉市 本千葉海岸	43日	閲覧総人員 8,079名 一日平均 188名 うち児童 5,285名 (児童閲覧者比率 65.4%)	12,358冊 一日平均 287冊	児童書 6,441冊 雑誌 4,752冊 文学 709冊 歴史伝記地理紀行 160冊 芸術、運動、娯楽 67冊	県内 図書館所在地市町内居住者 6,038名 図書館所在地市町外居住者 571名 県外 東京府市居住者 1,307名 他府県居住者 163名 (県外者比率 18.2%)
	合計	103日	閲覧総人員 20,193名 一日平均 196名 うち児童 15,294名 (児童閲覧者比率 75.7%)	25,129冊 一日平均 244冊	雑誌 25,129冊 児童書 11,886冊 文学 1,557冊 歴史、伝記、地理、紀行 334冊 芸術、運動、娯楽 288冊	県内 図書館所在地市町内居住者 15,033名 図書館所在地市町外居住者 1,619名 県外 東京府市居住者 3,297名 他府県居住者 225名 (県外者比率 17.4%)

年度	開館場所	開館総日数	閲覧総人員	閲覧総冊数	閲覧図書類	閲覧者
昭和9年度	安房郡 保田町海岸	31日	閲覧総人員 4,729名 一日平均 102名 うち児童 3,513名 (児童閲覧者比率 74.3%)	6,485冊 一日平均 209冊	児童書 4,874冊 雑誌 1,295冊 文学・語学 265冊 歴史・地理 51冊	県内 図書館所在地市町内居住者 2,456名 図書館所在地市町外居住者 55名 県外 東京府市居住者 2,160名 他府県居住者 58名 (県外者比率 46.9%)
	安房郡 天津町海岸	28日	閲覧総人員 6,626名 一日平均 123名 児童 5,741名 (児童閲覧者比率 86.6%)	6,737冊 一日平均 241冊	雑誌 3210冊 児童 2970冊 文学・語学 238冊 社会風俗家庭運動 93冊	県内 図書館所在地市町内居住者 5,705名 図書館所在地市町外居住者 95名 県外 東京府市居住者 747名 他府県居住者 81名 (県外者比率 12.5%)
	千葉市 本千葉海岸	40日	閲覧総人員 5,481名 一日平均 114名 うち児童 3,187名 (児童閲覧者比率 58.1%)	8,441冊 一日平均 211冊	児童書 4,991冊 雑誌 2,486冊 文学・語学 414冊 歴史・地理 144冊	県内 図書館所在地市町内居住者 3,856名 図書館所在地市町外居住者 2,486名 県外 東京府市居住者 414名 他府県居住者 144名 (県外者比率 10.2%)
	合計	99日	閲覧総人員 16,836名 一日平均 170名 うち児童 12,441名 (児童閲覧者比率 73.9%)	21,763冊 一日平均 220冊	児童書 22,935冊 雑誌 2,992冊 文学・語学 912冊 歴史・地理 269冊 社会風俗家庭運動 205冊	県内 図書館所在地市町内居住者 12,017名 図書館所在地市町外居住者 543名 県外 東京府市居住者 4,034名 他府県居住者 275名 (県外者比率 25.6%)

参考文献

(1) 図書館問題研究会図書館用語委員会(編著)『図書館用語辞典』角川書店 p646, 1982。
 (2) 赤星隆子「戸野周二郎著「学校及教師と図書館」の意義 児童青少年図書館の観点から」『図書館学会年報』38(4), 日本図書館情報学会 p167-179, 1992。
 (3) 戸野周二郎著『学校及教師と図書館』宝文館 1909。
 (4) 「避暑地及び湯治場に於ける理想的図書館」、『図書館雑誌』vol.3 日本図書館協会 p58, 1908。
 (5) 水谷善太郎「海浜図書館開設について」、『四日市図書館報』四日市市立図書館 p1, 1931。
 (6) 楠田五郎太「動く図書館の研究」研文館 1935。
 (7) 前掲(6) p71-73。
 (8) 米井 勝一郎「『兵庫県巡回文庫報』目次一覧—兵庫県巡回文庫の楠田五郎太[No.1 (1937年3月)~Vol.2 No.1 (1938年6月)]」『文献探索人』金沢文園閣 p 92-99, 2010。
 (9) 『千葉文化』千葉県立図書館。
 (10) 『房総図書館と史料』千葉県図書館協会。
 (11) 畔柳昭雄『海水浴と日本人』中央公論新社 2010。
 (12) 小口千明「療養から行楽型海水浴への変容と各地の海水浴場」『地方史研究』48(5), 地方史研究協議会 p 9-14,

1998。
 (13) 前掲(12) p.13。
 (14) 財団法人千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 通史編 近現代2』千葉県 p430, 2016。
 (15) 勝浦市史編さん委員会『勝浦市史 通史編』勝浦市 p927, 2006。
 (16) 前掲(14) p.432。
 (17) 千足 耕一、阿部 生雄、吉田 章「海水浴」概念の成立過程に関する一考察」、『日本体育学会大会号』40 p 112 1989。
 (18) 「大正期都市問題の諸相 東京市を例として」、『歴史公論』9巻5号 雄山閣出版 p 105,1983。
 (19) 野口 穂高「大正期における林間・臨海学校の展開--東京市の事例を中心に」、『日本の教育史学：教育史学会紀要』53 教育史学会機関誌編集委員会 p 30-42, 2010。
 (20) 富浦町史編さん委員会『富浦町史』富浦町教育委員会 p 721, 1988。
 (21) 前掲(11) p.174。
 (22) 池田和弘『北条村史』宮澤書店 p 237, 2001。
 (23) 大原町史編さん委員会『大原町史 通史編』大原町 p 894-895, 1993。

- (24) 中山愛理「茨城県における巡回文庫の導入と展開 - 1907年～1944年」、『茨城女子短期大学紀要』No.38 p52, 2011。
- (25) 『100年のあゆみ 宮崎県立図書館100周年記念誌』宮崎県立図書館 p19, 2003。
- (26) 宮崎県立図書館「海の図書館開設」、『緑陰通信』第64号 1面 宮崎県立図書館 1964。
- (27) 徳島県立図書館『徳島県立図書館百年史』徳島県立図書館 p51, 2018。
- (28) 「海浜図書館」、『図書館雑誌』昭和5年10月号 第131号 日本図書館協会 p254-255, 1930。
- (29) 岩手県立図書館『いわて 岩手県立図書館報』第10号 岩手県立図書館 p40, 1953。
- (30) 陸前高田市立図書館『陸前高田市立図書館独立館20周年記念誌「はまゆり」』陸前高田市立図書館 p30, 1998。
- (31) 今治市立明德図書館『今治市立明德図書館報』第39号 今治市立明德図書館 p2, 1932。
- (32) 「第七回野蒜臨海図書館開設」、『宮城県中央図書館月報』8巻8号 第44号 p5, 1940。
- (32) 関山洋八『青森県図書館運動史』津軽書房 p133, 1967。
- (33) 日本図書館協会『近代日本図書館の歩み 地方篇 - 日本図書館協会創立百年記念』日本図書館協会 p513, 1992。
- (34) 井澤益巳「臨海文庫の開設について」、『兵庫県巡回文庫報』No.3 兵庫県社会教育課内兵庫県巡回文庫 p1, 1937。
- (35) 岡山県中央図書館『本県の図書館界 第12 昭和12年9月末調』岡山県中央図書館, p37, 1937。
- (36) 静岡県立葵文庫『葵文庫ト其事業』静岡県立葵文庫 p5, 1940。
- (37) 前掲(24) p19。
- (38) 直江津公民館「夏季海浜図書館運営の状況」、『教育創造』6巻7号 p49-51, 1953。
- (39) 「大歓迎の“海浜図書館” 伏木国分海岸 児童らでにぎわう」、『北日本新聞』p11, 1969年8月3日朝刊。
- (40) 『臨海図書館』高岡市立伏木図書館所蔵 (写真資料)。
- (41) 「泳ぎの合間に読書 下浜に海浜図書館」、『秋田魁新報』1951年7月24日夕刊。
- (42) 洲本市立図書館ホームページ「図書館のあゆみ」<https://www.lics-saas.nexs-service.jp/sumoto/ayumi.html> 情報取得2021.11.27。
- (43) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会『図書館用語辞典 第5版』丸善出版 p34, 2020。
- (44) 前掲(43) p9。
- (45) 今沢慈海『成田図書館周甲記録』成田図書館 p128-129, 1961。
- (46) 銚子市公正図書館『公正會資料集』銚子市公正図書館 p28, 2006。
- (47) 「彙報 千葉縣臨海図書館 (千葉縣立図書館)』『図書館雑誌』第25巻11号 昭和6年11月号 日本図書館協会 p416-417, 1931。
- (48) 石渡福松「臨海図書館に就て (上)」、『千葉文化』1巻4号 p19-21, 1936。
- (49) 石渡福松「臨海図書館に就て (下)」、『千葉文化』1巻5号 p18-19, 1936。
- (50) 「隣組へ「巡回文庫」、臨海図書館を打切つて力を注ぐ」『読売新聞 千葉版』1941年7月11日。
- (51) 「隣組文庫に就いて」、『千葉文化』第3巻第5号 通巻24号 p1, 1941。
- (52) 「臨海図書館白書」、『千葉文化』第47号4面 1950。
- (53) 「ひかり号の歴史」、『千葉文化』No234 千葉県立中央図書館 p6-7, 2003。
- (54) 「成果あげる臨海図書館 (鴨川) 運動と学習かねる おかあさんからの延長の声」、『読売新聞』1961年 8月 8日朝刊。
- (55) 「夏休みをすこやかに (鴨川町) 今夜から” 愛の鐘” 「臨海図書館」も店開き」、『毎日新聞 千葉版』1962年 7月 26日朝刊。
- (56) 高市慎太郎「ビーチライフ創生プロジェクト「砂浜の図書館」実施の報告と考察」、『東海大学教育研究所 研究資料集』第19号 東海大学教育研究所 p154-155, 2011。
- (57) 浦安未来2050「2011年5月9日 海辺のライブラリー トライアルオープン!のご報告」http://u-shimin.genki365.net/gnku01/mypage/mypage_sheet.php?id=20020 情報取得2021.11.27。
- (58) 「本の海を泳ぐ」、『毎日新聞』1面 2020年8月19日朝刊。
- (59) 大洗観光協会「砂浜図書館、2021年秋開催!大洗の最高の海を感じる楽しめるニューノーマル時代のイベント!」<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000002.000087458.html> 情報取得2021.11.27。
- (60) 吉澤清良「図書館を取り巻く動向と観光振興」、『観光文化』日本交通公社43巻4号 243号 p4-7, 2019。
- (61) 松本秀人「図書館と観光:その融合がもたらすもの」『カレントアウェアネス』通号No.306 2010.12.20 <https://current.ndl.go.jp/cal1729> 情報取得2021.11.27。